古今和歌集正義

序末

三

八延暦廻くい宮水乃ころたゝ焼ゑ一事ハ尤帝変うつく常を
吟ろ礼例ま引そ一又長柄の橋を造ることまてろ事國史ニこゝえ
すとハいとゝもこゝ史の脱文なるへしやのて集中ニ伊勢乃ゑ雑波
なろ長柄の橋も造ろなゆもゝ今も昔ゑ何ゑろとゝん新波拾遺
集亭子院乃御歌ニさろ久ゝ波まも思ひ乃
らをつゝそ有けろなと同時ゑうこゝくたゝ乃ろ證也徐栈
ろ云文徳實録嘉五田仁壽三年九月戊子朔戊辰攝津國奏
言長柄三國兩河須年橋梁斷人馬不通請準堀江河置二
隻船以通渉波許之蓋よゆも渡久ゝく絶く渡ゑまゑりけろ欤
興風集ゑもゝ礼ゑてをあゝ長柄乃橋を

今ゑゝこゝえすしよゆゆを渡ゝ文攻めく渡ゑまゑろゆゆもとゆを
橋史ろ仁壽三年ゑ奏ろよゆゆもく船渡ゝとゑゆゑ人ゝこゝえますゆり
ろ渡をなゝ其橋ゑそれなゝこゝくあゆゝ也さそゆゝ年年
ゑ経く寛平ゑ未なゝ再ひ改め造れゝゆゑとみゆそゝ尊ろ院
乃御製伊勢乃ふみとふくゑゆゑ一数長柄をなゝろ礼橋ハふ
ゆゝくゝく舞ろを新ろく造ゝんやう礼ゑ也といゝれゝゑさ
ろゆゑなゝ橋の年ゝくいゝつゝゑゆまろを舟渡ゆゆ往ゝひな
誰ゝをこれゑてろやうくゑ朽ろまそろゝふ柱をゆゑた
ちろころまくふを成行しなりされゑ上乃興風の詠まこ世弟
ゝふゆゑゆめろ初ハゝこ礼奇なと其外を此年ろ舊さたゆゝふそ

贊寧なる者あり敕命を奉じ延喜年代の實録を撰ぶ人々
大きなる不審の事ありと宣へども延喜年代の實録を撰ぶ人々
勅を蒙りて撰び出せる人名を委しく深く信ずるよの世の後乃先達ひろすゝ此序を読とく
考良乃帝業出来の時代人麻呂赤人等事をさゝせらるゝ
始る前尾相叶ふ事すくなり此書すくなり事とそ
大同天子を指して申奉るまもり顕昭此義を用ひてまもり但人麻呂
未人の時代等を重ねて申奉るまもり其地よりて改名地
乃みのよく平城天皇を申奉るまもり其地よりて改名地
仙覚等寧楽宮御宇と云聖武の御世を平城朝廷との字同

一事と存ぜられるる大きなる誤りなり平城朝廷とも寧楽宮御宇
とも云ふべく元明天皇よりも先仁天皇まてくわうくまで
平城天皇ともやすくす朝廷御宇七世と云ふべきなり申
世六世平城天皇平城天皇ともかく師ともかくさく申
事なりとの仏其説を引くく委くいひ按まるる此後天暦の頃
まてくわうく梨壺乃五人勅をうけたまはりて解き申よりさる
ひとの愁ひ世を歎くのふる為富乃詞を抑順梨壺まて寧良の都
らひ奉りしことなりとかくくこれ平城宮なる事此時雖と云まるる
事云ふまでもまさ三位とある故とも撰者乃誤なり然而

て後人の書かへる迄修飾を云忠孝を長歌などあまた云ふ人丸こそかうれ今迄身を志を称つる言共葉を天川空ま
で同えあけそく正三位なくに身ハ不知のうとそうたふ頸服枕
な或人是をそすゝくむとみと通すれハおわさむりのうそ雨かり
とゝかを被しれをも浦とたにうたそうる事也とつゝ抜すのよ
真字序なき柿本大夫とあまた後人真字序をかさしよのをを称
後乃志すをとゝのそくまあき三つ共うそのの一句をとれハ四共御
時な柿本の人麻呂なん歌乃しりをなりなるとつくる也ゆくて共
いそこの文共そうる心ちす被御時まありくとの何とうあるき
那迄古事を尋くそうす一ととをも今乃ことくおわさ三つ共く

らわ共一句あまくをことわをも盡さるを同一事なまとを調乃
ゆふ時ハ其ことわをおれつゝはうまをひくくの地又撰者等
葉と人丸の撰とおもうれる事ハ昨よ引る長哥な人丸こ
そいうれ〳〵迄身を不なつゝとの葉を天川空まく同えあ
け志共世まくうあとこれ〳〵今を作共ハまるもちをたつけとゝ
葉乃身なこととのあるみくも志ろれうをこそさきよ人丸等
葉とそうして今共古今の前詞となゆるとよろこつる意なま
迄當時強な人傑かれとの共も時代乃遠迫を取このつまこる
うの〳〵真授をも志まる人あんまつゝく誹議をもつまさうん
為るよ迫世文明乃運るうをも遠く薦記を按へ古言を解をも

きつひにおけまくも、かしこき神とまをしてこそとまれさまふまじまくも、かしこき神乃一挙ふよりくなりぬるをいふ也
ふ〳〵んや

○赤人の春の野ゆ云々乃歌も筆業也八まあを歌乃心共
こゝろをあを筆つゝみと来し我なるゆ其あゝまをものなら
くなゝくいひしらぬ歌人乃々きれなりけりさす一枝
をさゝ物ゆるゝとゝいふ事も今ゝくいつも嵐山乃さくら頃満開乃
すこれゆをゝくしてたゞ大坂乃茶店よやとりるたゞ也歌遊
乃情思よりしてるをおぼつかなふ筆枕きんいゝみゝへなら
んこゝろになかいゝと也と思ふより諸説共こゝろ乃ゆるこゝろ

一歌ゆゝるゝとゝいひなしこゝろ乃ゆるもの也とゝいふもいふまでゝ既ゆ宿りこゝろ上乃
も佶ゆいふ〳〵んけ歌也今すまひ草をすこれとゝいふ事なるをやすこれ
さゝくゝ歌ゆゝきふもこゝ風いさゝるもの也若ゆこゝろふ景を
万葉考ゆゝいつ若ゆ浦ゆ汝乃こもりまゝくゝ乃ゆるゝ沼
なく物ゆ約ふあまりたゞをやりゆるく行乃意ゝをそして喝
わるゝといふ也芦へゆ一の言をゝと方ゆ字なゝあゝりて佶
ふいふ方角をさしてこゝをそれふゆ還乃字なゝの意ゝをもうの也
てひろくゝゝ川へなゝといふ言をゝ方ゆ字なゝあゝりて佶
ふいふ方角をさしてこゝをそれふゆ還乃字なゝの意ゝをもうの也
てひろくゝゝ川へなゝといふ言をゝ方ゆ字なゝあゝりて佶
ふいふ方角をさしてこゝをそれふゆ還乃字なゝの意ゝをもうの也

とに渡せる〳〵義也つゝむものゝなれい其わざをたゝやう
さうそ芦〳〵とよき古歌ゟ野之上山〳〵なるとあるたとゑ
〳〵なるもゝ上乃略詞也と思ふたゝしくたまく萬葉
巻十ゟ旦霧八重山越而霍公鳥宇能花邊鳴越来と
よめるう此花〳〵も外郎の山ものなるまつ此同巻
ゟ五月山宇能花月夜とよめるも山ゟあるたゝしく
ひろく咲つゞけるを雪〳〵今をうつま山をさるもの
みくさとも高く繁さなとやとりて鳴也里中ゟ姫山を
中ゟ此類ひろくあるたさて集中ゟ雑波乃音のもはら
ゟ志ろき我恋なとよめり鶏乃さゝく鳴ゟさんさ芦あれた

ゝくゝゝゝゝ思ふ〳〵てこゝろふかひなきも常
なれとそもとゝて打ゟ〳〵ゟうゝの二ゟとゝをあらんも浪也
ひろさすら音〳〵とゝおもふつゝうちこたもぬもの〳〵
只一むら乃如意をうけ郎山なとゝいつる同しあやまち也
ふけ人こをおもくまさすられる人をうれ妨けよくにこゝろえ
かくいとのよりくふ中ゟ〳〵すそあやまりける

こゝ乃両説他外ゟ世く時ゟになかゝるべきこゝろ人もす
くれ〳〵すとの事

これゟもさきよりうをあけそなん百葉集となつけられう
歟

かのおかんときよりやまとのくにとしもあまた世をとろき
ぬるんなりにくる
大同元年よりのち延喜六年まて百有一年うれもてとしもあまり
とをへ平城天皇より醍醐天皇まて十代なれハ十つきとをあまり
むつよのみ世集の奏覧を延喜五年とおもひつるもあやまりなく
實ハ延喜六年なり五年まてハ百年なれハ今百とせにつまりも
あるをもかくいふもこゝなり六年とのたまふ時ハ事ゆゑこれその
つゐ事ゝくまてのこゝろ
歟ひなをとゝろ序也けり歌数千首ハ
成数也華ゝく千首ととゝいふハ一一年数のふるく百年なるを引のつゞ
百年あまりこゝろ書いきたあゝすまて實ハ百年なるんゝ年を百と
せ世ハ十つゐふなんなりふけるとあるんをおもくをたやすく

このろ御ときハ實ゝそもゝくいきくく何をもとゝ
ゆゑとつけるや文勢なるんとゝろるもゝ此ありさ御代のふこゝろよるゝ
あまをなきをこのまをとゝくゝ御ときものあるんや雄渡和尚ハ百年ゝ
御ゆゑとふ文字ありやうとゝろるゝ此なをゝゝるゝ朝を理も
相ゐれて尤得よて渡人實ハあまりなりと思つるより其意を
輕くせんとゝくふゝを有きかたるものゝて真字序ゝを時歴十代二
數過二百年と書ゝをゝるゝ一或本ゝゝ此過といゝゝなれるきハ
五年とあるまゝのゝんとそ 餘校ゝ集中ゝ也ゝるゝ此
えゝゝをゝ五年まゝゝゝゝゝゝ右大將定國卿の
うたゝゝなゝすゝゝるも此ありさ御代二百年ゝ此歌ゝ
罕此賀の歌を專ゝ延喜六年二月なるを十四年なり
とおりんゝるよりかゝ此ゝるものゝ也其證なる事いゝこの御序ゝ奏ゝ六年
二月ハ奏進若なるをゝ入ゝきゝ事論なゝ奏ゝ之度乃ゝるゝ乃ゝ入ゝきゝ
うゝふゝれゝゝるゝ 延喜七年乃大井川行幸の時此ゝ二首同

年七條の后を悼奉る伊勢乃長歌一首同十二年亭子院歌合乃歌二首友則逝悼乃歌二首すべて七首也此外あややなしや今ある人よむ人おかこそ

ひとわろく深き十二年也と書よせ

いにしへのことをもうつさむ人よむ人おかこそ

此一句難波なにはなきさを正しきめくあり事をうつさむおこうさきのくいにしへのきなるい所乃文なる事うつさむ人よむ人おかこそ

ある今これ事をいつなきことと引つけくよむ一一既に春満宣長翁乃説也

かくろとくいにしへをさされとも是よりもさきに此歌をあげめそ

百葉集と名付給ふれる又この此時よりこのうつし年

いやとをあまやせをとうきよなんあやに久るあまの語

も所文なやとして世ふきうつすこそ百葉の

時代乃さうひうを紀氏すらさる事いあらしとおもひす

今うつさむおやまやせ 徐枕遠読等もおなうこと今ふことくなり試さ

すとふ結句を男ひうたれをすかもとも

てうたふさの初すうすことにとうすことよむ人おかこうう

人おかうすとうやともう抜き文をなりきと取うへき事論な

まひとうふきをなりきと取うへき事論な

今此とくかに此所時さの句ここに有時いせ代十はきよなん

なをふりう今これとをいとをいてまとわりうく

竹よ本をはきさうんやうなれい个文をおこさん料なまさい

舟一乃事をさと雨一事をいいろなる一一猶正文まれ

きくだろ一一上すすこれ

ろれさ引ら也

今このことをふまえ序のきくだりたるたぐひさへをいたやまさやうなれ
いまじ

上文のごとくなんあるとふたりこゝろ事酷なる無
せろうぬしさく官位こうきさへをいはなくてその得失をいた
んいなくやすけき同也れば歸ひてそれすとも也
それはふたりうきせさせるその名さこゝろひとふすれたち
はちうきさせよの一句さいはめて衍文なり真字序は迹代
古風者絶二三人とまの迹代乃諸よつきこゝろ後人乃さかし
なうゝこゝ真字序乃迹代云々ところへとこゝにすゝへ乃
事をを歌乃こゝろをもあれ人をうるひとりふたりなきさ

とあり所すてこゝにとふ詞すれいち迹代といふをあくれる也
さ原よ再びお明きをふゝおよをあらをを又上よをこうきねた
うき人をいまじとふるも迹代の人也それをうゝて其外よと
ふなる又かさるてさこゝに迹さ也よわるゝきものなう
んや更なことわりなお事也こゝ其外よその名きこえ考る
人たすれいちとふ一句なをい迹さ也乃語中間よゝくと
その外よ也名をたくこゝろもこゝろをみるく也又すれたもハ
いふゝへ大うさい句尾なおさきく波をおこす詞也今もをれたち
といひとあてさくはをあらこめて儒正通脱にふゝ也今す
なをちをふよ也の言をふまくそ

ち女おのの布ぶところよ抱きてく云く源氏君なり今うなさは
ととはさまうすれいち儒都まわり給つて桃華みよ花ころ
ものくなまうしふ久るやなまうすれも祢ぢ春よ咸さ
ろいとふ今又春くくあ人こもを詰つをなと云ひさうをていめり
すれもち大概くこ抱をとりてきつくうす又ぬれいおつところ
すれもち沙みとりなろ薄やうふ云こまこ竹取抱語よ綱た
ゆうすれもちよやしまれ久れつとよ落こまつとふ文字を
さくをくこれいよく句尾よきくつお事まうふつうす今い
其向とやすき一二をあけくをおて知つたまくい句訳よ
なくもあるよ活そてよよ引くう源氏あまれもちなともちひ

て句頭よおこのんとくく今本よいのこまつれよりをとなく改やち
其後寫味の和漢よを見史善悪の心水も取入志ぬをいすれもちよ大概今
時すなるとくいのをおころ見ん二をを今世とくいともひくすれ
何とこととうり思いすれもち民語なくいやもち句尾よきくく
古比
格也　さてをくう句訳よおく事となるとくいは即乃ち比字を語
まあこいてくつくひもいれくろ中こうより遂よおく漢文の方まつさ
たる迚さてすれもち比意いおの之後すて是をなすやうてをふ
也すれくちとい呼へうこおよりすあをまれとうより作比のもも
といもるくいは調の句能也是を於古比するれくちなせるれくち
とい云て定まる言すそいはなのをんこひちくまおく遂よおく
ひとつ比語となれろいは後也る者乃字をてつとといるよあてく

いたくあさ人共よりも紀きあ
ふくこころふかくの事共をむくみのせをあくことろ
ん海道よりみさとの御國ぶりの事ともすくやかに
それ〳〵そのやまとあこめ
廣秀と詞のやさしくすくる方より其事〳〵實をあるあり
とまたその詞共のたくみなるとよき秋なたとへ其ひとよ應をあ
とあさ人共ものの秋きこえくるに是を真字序よ其体
迎偕とかけるあさ人とくみなるこころ例共ひら事也さに畢
俗なる方よ重くこころみきあしますたく夏よあるあたとへくる共
こ先哲例共真字序よりくいやしきたとへと思つくいみ

き詞迄都くおこれる姿とは
いとそまりますそのすなるあまりに其とくまで海さくひを
うなひくまくまるおもひ取きものを
一乃あさこに匂ひるかきをんいことは
宇治山乃僧きをんいことは
すみる紙の月をみるあるうきよ
日の庵そこやらのるこをすむせをうちみをつよなを
よめる歌おほくきこえれこれをのよつくよくあく
喜撰乃歌くこけ高くやすらなまとも一首乃こともけなま
ひもてたつのくまるを紙の

まを得ることを業平た詞書しるしあまり有なとあ
んなれ得ん方もとなりてやみぬ其このこと尤軽し今いふこと
まのいひく得さるものことを後ふ世の其おとき也適拘ひ評と
きろ其たつまされと一こひうくれんをきれもとのもの
其をいつなれた上をうけくやみ事語勢自然な
ものろ勇きをさ深ものつ今時おとしめたるそ其微意をし
ろきを

此のこの其人こそのおきこゆる野つまおろかつ其たひひろりは
やしなおろきこと其業のとくいなおほうれと歌とのこと思ひくそのの
さまおろめなるへし

此外をせうきこそろる人そ其数こうきりのく多しとのともうる
ろこころを得ることよまそその人たあしま其歌をうもれもの
とおものくの其天地うこ紀鬼神あそれむっときれ切験ある
事ま其おろめなるへしとのつり歌よむとき大和魂大和言の
なしおまくみくの自然其道の華なる事をうまれう学て得
る其道なるをたいちんとしていまあ人うくやまんとまても止事をえ
すろ次事ふうして常よ業なる事をしまされもそ
其かと人とあるのさり朝となく野とうくたく天の不ま詩そ
あまとおろうく歌を無其無おろこうる狂んして其
配う其媒とおと思ひ落せる俗弊をとるうくて書給へる文也

すべく通ふよりて代威稜嶷を憚らさる豪放乃志をもつて
其さ海とふすれたち詔ひ
乃仏をえさらん人をもつて
しめたりんとふる仏まあれるさまたく詔ひ寺たる仏き
まをも甚其さまは滑これも甚そまは海おとふ甚其さ海やー
なと一むさるふつる餅載ひさ海とふたつも此所と真字序ま
大唐清以艶為基不知詔之類者也とかなるはく海くうな
つるふりり
吹海る今すべきのあめしくこと
里ま
なんそりめる

是より今上帝乃御事を中出く撰集乃おかせをうけまま
里ー事をふ川乃時九ふ甲ふ九年をつて今上の御也ふり
めく昌泰元年より延喜六年まく九年也是ふりてて奏
覧え延喜六年ふく五年にあるさをふる一諸詔ひ、とく血
年也奏覧とする時え八年なれた九返里とふくつふ次の
文ま延喜五年四月十八日ま大図記紀及則ちとあるたすれいち
動也第一是上ま年え百年あまの也ふことふるとふー一ふる一
諸注昌泰四年延喜五年奏ふく九年也とふるえ昌泰乃四
年え即延喜元年なるとうる歟へあやまるる也 頭注ま是也抜く
云処喜帝即位已
来昌泰三年延喜五年奏八年也寛平九年受禅仍称九迴也加受
禅年也以二受禅年一付二新帝一文武十一年也付二先帝一元明七年也桓

武後改唐如此其以下迄桓武帝之代事也とあるを服氏受禅の年号
先帝之代事也とまた帝例也とまた孝徳文武元正聖武孝謙
光仁平城の数代即位同年ニ元を改めたまふ事也後世二年一改
新帝の初年とするの例也況や今上先帝御字をかへさす年を
えらく改元あり一と称ふ事受禅の
年を加へらるゝの称ふへきんやおもふに一
嘉五年歳次乙巳四月十八日臣貫之等謹序と書るハ此序の
文を謙解して是を奏覧の日とこゝろえ違ひぬる例也傍事也
古来此真字序を紀淑望の作とせる其ひがことなるもいへ
ともまの淑望を要旨雄の男紀氏の猶子なれハ同しく此集執筆の
任者なるハ其奏覧の年月を思ひてこゝに書つきものならんや
又假字序の趣意を解きすてひる事のミ書つゝぬるものなら
んや按するにこの序を撰しく後人の仮作ならんを又後の

好事共さうらん淑望を當時の文人の親族のちなこある故
ニこの事をおもひてこゝに書のこしなんさるを康平の比まで
夢の世明衡法師ひろく淑望と雅宣めく奉朝文粋をえらひ
く世人此集同時ニ出来けりと思ひてく集跋なとゝゝくるな
ん一ともるを先哲其真偽をも弁さす彼序ニよりて此序
ととけるハ甚ひくこゝろえさる事なるをもれもこゝに真字序
乃文此序を撰し得ともいと和漢乃語勢氷炭の違ひあるに更な
ひとへにもろ〳〵の書ニ非すや其意を得すして推あてゝ書るもの
なや假字序を仮字序ニ解つき事論なきをひくすゝ真字
序ニよりて真字序を仮字序と解し得さる事なく仮

字序を解しえ難きさの故也譬ば和語を衆の如く漢文を巌
ゆくるを衆共流るゝや古今まやうりて絶ざるとのごともまそらくを本の
水なあらず言語の移やすきこれる哈をこれる同じやく水と遠白く
ちく其水脈を探るよりも遠き源を尋ぬるこそ漢字のこゝろ
あるや其一端を取あらくも引するものなれば其巌の苔むして
こゝろく動ざるが如く萬も変態なく其こゝろ事なきさの故な
萬をゝる事今ゝ和言ありうりのゝや更ゝ今れもつかあら
ず然れ其始甚ゝやすきを以ておのづから其ゝやすきを捨ざるこれ
雑さ言を以ひちんとするをひなのつゝ終ゝきものこれ
後人真字序を離ざくゆ序を設事あるいさゝ而已ざる而已

序和漢死活の違ひあるを以ていまだ大略を述ざるに遠
つるを無也さゝ其ゝこゝろき諸更後ゝ五除三位の此真字序なきを
読本まゝとれるゝ識つるゝ似ゝ其ゝく紀氏ゝ長歌をいせ而已海
の浦の次奥拾ひあつめとゝすまゝ而已緒のみこのさまく
ろなひあつす猶つゝ而已年をつく大宮ゝのこゝ而已ひるよ後
ゝつゝゝこゝとのつるこゝ而已五年四月より巌香殿ゝまゝのゝく集め
撰ゝとすれゝ短慮不ゝ而已身をゝくゝく事意すゝをゝえ
す年をゝこゝてなかゝ宣夜をゝゝ清のまゝるとゝ
こゝろなれい是を六年ゝ越るゝ證也こゝ而已歌奉一時の目録乃
序乃長歌とあまゝ而已集奏進の時悉ゝの長歌と共ゝ相ゝて

奉れるをやうやく集中より得てこゝに世に給ひしかども猶書写
に長歌を例よりもてきすしてなげゆくふまのやそ
なれい古稀よりこえたる人まきにてき得る事あこと
筋あるさまのなりとしてあさこゝをおとやをすくれこゝにつゝと
にうつすや今引くる数句も其意注家の説よりたがふるをもくあ
やしむ事なれど今は歌よ付くる毎より又この長歌の結句
よ我宮よ志のよまおもふ板間あこゝろ春雨よりもよあら
んとあるによれど大師撰定の功を六年の春二三月よ頃な
そ率ぬらんさく委曲乃日をやうくそ社宮よ十五日なを
まん然かもよゆゑを本朝世記扶桑略記日本紀略抄等

みれ延喜五年四月十五日を擬進乃日とし一顕注るも國俊朝臣
敦光朝臣よ本朝帝紀等よ五年四月十五日擬進とあるよりお
ゝされこり斯乃ごとく諸史皆十五日といふを奉れつゝ乃ぶき
なるつき又五年とあるよ六年よあやまちる事よる委しく
弁せる如し史めて原本よ六年よ是を六年よ当つらんさるを諸
史よ擬者ら後人模倣よ真字序を漫望乃撰と意得ざめて
明証也と思ふれより序乃五年よ奉仕乃年なる事ゝ明
らかなるをさく意よ誤解して五年と直しく記されるり也
さらく十五日をおれしく序ま十八日となるすつきをや
三日よ当りるくいさゝよ事なれいさる故も有つき事よ思ひて

是をのまいもとよりまうを記し置れしをおとゝし十五
日とやあんめれ果して迎こうはれ大日本史また十八日と改め記されたり
こゝにまく五年此奉語を六年乃奏上をともに四月中旬ゟ當
里たるよりまのつゐもの也
あまのさかほこうつくしき波やしまのうらなみたちさわ
ぐめるみのうけつゝをふみわたりいとまのろくれことをすくなく強ふ
つまりよい舟人の事ともまもりこゝ強ふとて
〳〵まもりこゝなをし給ひ紀氏れ和歌ますれる事をおろ
大御世おろ〳〵やそうくはくなしめる大御國れ外ま

てをおろ〳〵ゟとの也實ゟ
まんこゝ強ふ大御ゟとひ
ろ道をおろ〳〵給ひ紀氏れ和歌ますれる事をおろ
強ひ給れさる院の御うたゝ
のおこゝろを也秀を也おろ
ろ〳〵のうん抱ふ大御政同しめる事れ經き中也諸れまをも
幸強ふこゝと也古れ事をもまれ〳〵ふいます人乃こゝをも歌
のこゝろをもとつゐまおろ〳〵彼古れ世ゝ乃命と奏れ花乃
あしき秋れ月の夜ゝとゝ也ゝ
事をも忘ま強ひゝとゝ也ゝ

萬葉の後久しく撰集の事絶えたるを世々の恩しおこさせ給ふ
ふをりふさく此文あまたさし給うつてこゝをひろさ御めく
みこゝと對しよろづの事をこゝとめろく乃事をこゝ
と對しふみ〳〵こゝとゝもを對しなまをこゝと後乃世
こゝと對しなりさろに甚こゝをあらはすなくこゝの如き先
てこゝきせすくこゝをつゐれとも〳〵義理をこゝろ得まくつゐを書
つゝき乃ふたくある詞をこゝきあるく事をこゝろ得ず文あるく
事をつゐこゝをはゝきさく思ふまゝなるゝ世ふおよひあさこゝろひ
也 千載集の序ふみをちまもこゝろ得ず春林ふなんうにくるあまもさ御うつ
こゝ秋はしまた此外まくあるひ初ろきこゝまた雪の花ろを御うはしこゝ
源氏物乃巻々を御きあうつこゝをたやしまたにあまもく〳〵こゝなと思ひけるもこゝろ得ず文
こゝろなりまくふさこゝきこゝをふおのつゝうけこゝさう

えたる方ふきこゝやうんうこゝをれ者ふろ御
林ふかゝれを風人雅乃ある作さてもを玩味すべし

延喜五年四月十八日ふ大内記きのとものりふ御書乃ところふ
この事ふ候ひけるゆきさきをきれこゝひ乃さう宿おみ御ものこゝろを
御つゐ有をみふの者こゝろをおろせこゝろをく筆こゝろをまつ
ぬあるき事うつこゝをもをしめ給ひくゐん

延喜五年四月十八日ふ撰集乃勅を蒙りこゝと延喜十八日にこゝ
御きこゝをこゝと筆こゝを奉こゝめ給ひくゐんとこゝま
てこゝ引おほくあれを奉進ふ日也とおもひこゝと真字序
乃仮者詞ふこゝろきふあやまちなる事既ふ二つをよ〳〵奉
進ふ日ふおもひこゝとをそれを序ふ書為ふ事こゝを奉

日とて序書しるし同日なりけんいとれなきをやかうと仰ありき此
序ぞとも聞とりつゝ五年四月十八日を奏進の日とおもひまうけ
いそのきこと更まこと家集を延喜の御時やまとうたある人を
めしくもの今よ人乃うたを奉らせ給ひしより新香殿乃ひんかし
なるところまく歌えらせ給ふ夜ひるつかうまつりたに
仁壽殿よりもの檜皮ほとくきまのなくを同一先つ四月六日
乃夜なりけまで先つかうまつりしくめりつゝ
よまの世給ふ奉る あとたのり殿上にて夏ごろ
かやうにあつゝと我おもひおとしめ給ふ
誤なりんとおそれつゝ筆

つゝめさきなれも論うくあやまり也四五年ぜ四月六日とぜんな
もうことにとなりをいつく場ん人きとおもふ
年四月十八日とかきつけるいと又
六日ぜ寫誤なるべし十八日ぜ六日とあやまれる
もきくるに字形ぜ似うるよりまち也殿上まこと二
奉ぜうことそうもしめたまふぜ日夜更るまくことあり
そぜあく十八日なる事明らかぜ今ぜ判奉ぜは
服する也されば此家集乃詞書も五年四月十八日かゝせ給ふことをう
け給ぜは四五年詣ぜとまつかき也列ぜは官位乃次第ぜよ
りてくかゝれうり實を紀氏棟梁まて其事をそすゝうけ給ぜ

よりて推あらたに一勲一会をうつし也されとも家集共終りて八年二
月乃歌乃え石社前文ま八年八月をもつてかれて幸生ふ世ふつ
ゆく九年ま天をも有めて又洛南千本乃東なる中堂寺村ま紀氏
社墓所也と云傳く四くより福大明神と申て迫村乃産靈神と
あめて年社なる是を多より今ま其いわれを知る人なく稲荷
の社として幣帛をそ献代とす元有し木像を本國寺塔中
勅持院ふいてうつし迄き年此像を摸し刻まをる時門人合
光院日辨其餘材をもくり小像をつくり彼中堂寺村
乃小祠ふをめてま片今ま紀氏乃祢霊なる事ふつく人を
もめて又院乃學一條乃菊ま同く福大明神乃社有是片紀

氏社祢ふをきう所とそれと終をる事なとすべくの為き
事ハ別記ま遺をや又勅物忩の傳記ま十月九日ま終日とすま
れきハめく古伝なの一ま院乃町なる八四月一日をめく参とす
まま據こつく其故ま沒拔集ま紀氏乃三月つごもれ歌ま又
もこん時をと思二とうのまれ我身ふ有れやさ春れとあの
左注ま貴之こつく同一年なん身まのりふるとあやこ片
何心なくよまれうはさして思ひあまをそうれうる意なれハ
まこ痛こつのまめ行とたなる事論ふされハ四月一日ま終ふよまれ
うの翌日なれこの風いさる事明ま一又家集ま世中ふそく
常のこともを生ま々れハ源公忠朝臣共ま終ふをやとく

なるへしすへて誰ゝ千年長歌乃所よ毎年雪を
みるよりて感まそれてる加る同しくへ乃うたるまあ
らすしてもいたひを顕奉難波なとも友をいたひとりこれ
を正しくつき原もいたひとのこと
同ろくことありあるを添也よる君をひともあり外より
君原をあもそくさますてよくこの風てり今もあれ君をひとも
とあるによれる渡人乃もとのうしろ一又相坂山乃句も顕奉難
波奉る相坂よりくとあまそ山乃字なりの詞をとも
ものもの一つ山又ものもいのたもをいのたまそ久礼林を
いのもの山とそともいたひ旅人道祖林よりも句をなすより

あの一つの事代通記よ毎年りたも久今云ふけ也今も其神を
いひきる坂のことそそして真よ句をいけりとよ新年祭の祝
詞よ水分坐宇神等とあるを水分乃林のいます所をそしてやう
くに水分とつる風と新のこと同一意ちこ也無号伊駒山もむ
けいこれ本共もたに岩ゝ木ゝ榊ゝくたもとともこと後成卿
乃歌よ共山のもゝくよ新年ともめさと歌ふ祝ふ風とよ
まれるなく引あそそて思之一節枝よ新撰和歌集序よを一
千篇とあれを奉ハ千首よりさるの但渡よ加へる又大数を
挙て云原のとよりこれ三也首或ハ十首廿首ちもまそこ
そあるも百ち有餘あるんを幸て成数なるんつるに只千首と

みこと雖ㇾ言ㇾ二千年一一言ㇾ百ㇾ年ㇾ百年ㇾ一ㇾ言ㇾ二千年一ㇾ
とも書れしまゝ年代を干うとまりはてしまゝとあらんを何事
うかゝんよりて拾遺に延喜六年奏進の時より千首を撰ばれ
や其後又さしたして後撰なと仰付られ延長乃頃乃ひ
なとふ度ひ追加やうなれ共なを漏る古歌ともへ
らまた我も我もと抜去なと意る百首餘を及ひうる
改むるさまの事なるへき序をもとめまゝに有々なる
しされとも奏進後ち誤もあまた入ぬ又後ち
たるを墨をくけちうる奉ぜうく傳写せうる彼墨滅乃歌ある
つきう後ち撰集なとも奏覧の後久しく間ありて精撰し拾

ひまうく勅しうく撰ぜうめしそうれ類ひあんなるに事
るへうらんをおもひさの流一一修撰ぜうれ中い續万葉乃中世と云ふ
歌曰二続萬葉集一於是重曰詔諸類所レ奉歌集一とあるによりてくさ文の万葉集ならぬ
らしめ給ひしくなんとあるも彼續万葉乃事まうく其中より再ひうらうめ
てあうさめて又古今集と云事也と心得うる也さ仮字序乃おもむき
此四月十八日四人に勅ありうく古今和歌集と
けうく奉ぜうれ給ひしうく今此序を集めさせ給へる故授ぜうれ
異義ある事なし按するに真字序は仮字序に対ふる名にて
書ゝ也後めうく〳〵さいうれをなれいかさいう續万葉とをひれを
てさうる浮うる説也世ぜうあるへうぜうう
此集撰ひ始ぜうれ給ふ間乃うちは仮名序乃おもむきなるへうれ
此撰歌中おのやけうさうて古今集とうひなまじくなれ
ゐなへうんぜうれと一うひ古今集とうひ名はうく奏覧ぜやなへ一正
号ふひとなふ
一さにあうす

かくこれうひあけめうらまうくやまうさ水乃うえひさまの

こよ数おくつもりぬれい今もあまつ川乃せなるうらみをきこ
えすさこれ石ぬいたるおとなるよろこひのこそつるゝき
此集ハく一度撰たれて再二度よに出るの事ハく数さへおゝく
集められまた〳〵彼人これぬ事と雲りゆくつき恨をゝく
ハ遠永く栄えゆむ歌ひのそきこのことも真字序ことに
ハをうつして渕霊当歌之聲寂と聞ハ松長当巌之頌洋〻漫耳
といへる此集の祝言ま〳〵あらて大御世をことほぐる此者の
意今もあまつ川とうたよりいひろく大御世ほぐる文也とおも
ひ誤る也例ハ渕ますへうたよりいひろく大御世ほぐる文也とおも
我ら枕ハ葉も春ハ花まつ

よれなのさかことれも
此まくら詞も真字序ま〳〵ふ
ふなと出ハ仮名ハ書なたらすまくハ古事記或ハ文選なとの古ま
仮字つゝなんそこれもそい都ハく此序より校ハるなれも
漏ハ一頭注ハ某抄等ハそれまくと云性ハ真字序ハ注ハ当と
かくる同心也といへれこれよまるハ共ハ此世そ
あるこまろとふたおこれる自称ハそ分高貴乃人ハの之ハ
俗おれとひ或ハ此方（コノハウ）なと云ハ似て不遜乃語なれハ此序ハ
とうけさこに書つき給ふなあらすまくさらぬそ或ハ
なれくる中ら〳〵或ハ児童乃詞ハ云乃ハ枕双帳ハふくまゝ

うやくに薄せる也彼紀序乃ごとみ一篇仏氏のそ
とまでひて訛ま言のごとく風のそこに乱もつとあるま文勢
語脈のち悪事なくれも今も我等とうを一向として拙き詞
も春此花ごく虚きさ名ともむつてく書ろなる
一一真字序ま臣等とうを向として詞ゆ春花之艶名寒林夜
之長と対句ゆせる也今乃語調をうつせるなれをこれをも視と
すべきものにさて名此長きといふ事いふ也後世ま長く傳ら
ん名とふ意也ともたすべつきなれとさく詞もてらいすもと
より他者の意然ま此通ま長せるあをいつるなる
べてそ音まて長きるといふべく訓すてなのーとふべきな

あらす只拘れりつまでけいやま藝の優長をなりとをも
ぬく明るともいたん事なるそて有ますさ也漢文の撃へよりもちます
くおもてるものそ此序文大ごく漢文なよりらくおれる也
いとごやる事もまれるせいうて漢文ま此よれるとのまま
當時漢字ふうとお入も更ま出身もなりてさお事國史學今
なとふよりてあるべーとをそのうみよりごをやまくお國
の學とふものなれいやうく性古此事をも志る人なり中
にも歌の慶もる事いと上文ま尽をるらぬーさて其歌乃道を
やくんまい漢ま此力もなくて此文ま志る方此あれとをこのりてかの
詩文をおこもとよみる也更ようけひくまくれをおくい其

れ〻を貫之等といへるも此序紀氏よりはまへおのゝ名を挙て賜の授爵とこの故真字序の末に官之等謹序といへるは
彼奉詔乃旦を奏進乃旦といへるひとつの例ぢひのうきなる
事既ないつを同義と思ふべうす又此仮字序もおよそかゝれ
ど一名をあらん事論なく真字序を漢望なるんを貫之書
るいこゝ是さの旦のを後人の譯文なる事知べき也 修桂甫成田山三
私命令草也未知其所撰 紫寵業既是中納言藤原朝臣敏行朝臣と貫之何敢有私
余一拙則此序 而敏望奉論修撰也と貫之書
つき事也何を憚て他乃名をかゝん事論なく真字序を漢望なるんを貫之書
と花山僧正業平を在原中将康秀を文琳なとなめ〻〻書出つきものなる
んや高砂いかるたゝのいくさ紀氏私な筆せ さらくうこの
ーめうをなといひなるものゝいつまで無智の故とぶ也ー
事とこ返まるとき勅撰乃事也平城の御時勅を蒙て万

業を授う人丸いなく此旦と其例よりてそ又此後
此事あるときとつふ也文旦既没文不在芸平といまよれ
旦といへるき有ー
たとひ時うつりおとさをこのひうれしひのきうふとも此のれとーあ
るやうをやきのことさえすれのちをうせすしてまきれつう
なのくきこもりとのれあとひをーくそまれらハ
是を陳鴻長恨歌傳と時授事玄樂盡悲哀とぶ
ふ也より此集乃末長く伝らん祝云なれど其文おのつうろこ
業えらくめてたーとも此ことを味ふーさて此歌れとーあ
るやとふをや此言ハ語くあらりてひもなつ不通の語也さ

れいとま乃事なおそき歌共心ゝ和ゝれと猶退きゝ水も又吹
まひさ〳〵ときまれらハとおなかめまて葉ゝ水と文勢悪くこの
なをます此前雑波事ハ此方ゝ書柳乃名たゝすとあを
これそゝ一かりゝゝかくてうゝ始て文理をとゝくのひ語調をめく
たきすの也抜ゝ後人ゝ一共語と文字の事と意得一よの乃
をとゝく云の此文字と一書柳の語私をく重なれをとあ
ゝをやとよみなゝゝやうに此あやまちゝれゝ文字とゝゝ時た
やうて次なゝ島此治久〳〵ときまれらハとゝゝゝ水と
まなれを彼大井川乃序ゝをゝ此集未の世まて云く
とゝ書を読とすへ一をとよを此集のかく世ゝ行ハれん事ハ当時抜

者乃のけて思ハれゝゝあゝまを
す島此治久〳〵ときまれらハとゝゝや傳ゝぬ〳〵書柳のハと絶
乃ゝ又長歌の内ゝ此撰集の一挙ゝよりてかゝる出身の事を
称ゝハれゝゝ仏ゝゝめを此集萬葉のゝゝ歩く千載の
遠きを真を實ゝ大宮の月をみるめくゝ作〳〵まをゝかゝ洲
をゝゝれゝゝんゝハゝゝなまゝひゝゝまをハ云も出ゝゝを者ハ今
よとハ此上皇とゝ歴朝の余波を受給ひて詩のゝ尚ゝ称ハれ歌
ハ大やうめ〳〵ま方ゝとゝめて事を教まへ給ゝ奉るや
かく〳〵ますゝゝれんを海なく量を雑きをあやふまれゝゝ也尤
往昔よりゝこゝれゝ勅命を蒙をいふゝき姓名を列称く

撰進せられ、若干の書も著はされて其名のこる遺ちぬ類ひみしもせず況やこれいにしへのことをくはしくのことを辞旨ねんごろなるものをや。されば今事ひさしくへだたりぬるをおもへるに、古集をむこうにして撰者の心を探るにそうの用捨の意得がたくいとも多すべてさて書載せられたる歌の素性正しからぬのつらいたえずといへちかうもとひなくとも、もとの集中の枕其歌おのづから其調を得ざるこうなるべきことわりなり。後世文をこのみ書つき事としてみさをなきものは調を詞もたしかならざるにまかせて、なかく是をくちをしと思ふ人もおほくはさしも意ともかけもせず序を規則として学ぶつきこのなを枕詞の事いさゝか歌のさまをもこゝろをしるべくまことに古今集の序ぞかし

うるはしきさまをもこゝろをしるべくまことに古今集の序ぞかし

いふしへをあふぎてこゝろをしるべくまことに古今集の序ぞかし

歌のさまをこゝろをしるべくまことに古今集の序ぞかし

の事をはさまべ〳〵ふる人也門人菊岡言興云このいふべ〳〵也作

きて云ふに彼いふべ〳〵也注家説みのとゝ云ふいふべ〳〵也注家説

べ〳〵すれもち今此延喜の御世を後ろこゝろなりてこゝろと思

べ〳〵ろいひこの事なるべ〳〵といふろに注ふべ〳〵今をめそうしていふべ〳〵

とゝ云んも今めかしくゝ今をゝ意さうめかをと同一こをゝ事重ね

べ〳〵きゝもあるべ〳〵ゝ此古序の歌載る此古序後世心あらん

人丸集をつくい大同弘仁の古を仰きたふときを寛平延喜乃今
を慕たまふんやと竟其年間の勅詞金聲こゝに発中ま
盡をれい也此古を仰きと云ふいつれたもち紀氏の
集ま昔今共人乃歌奉ま也張ハ〳〵云ことあろ當今まあこれの
大旨ま幸の序ま此ことの葉ま共ま也ま今を當ま今ろ
〳〵く後乃人ともをきかん人云ことあろさい今を延喜の今をいつをこ
ハ共ま也後共ま也ま共ちと思へ〳〵古今和歌集共標題ハ此大尾乃ことを
彼解ま安〳〵おもひ共ま也く古今和歌集共標題ハ此大尾乃ことを
をうけ〳〵ろ名義共也と志ろ〳〵按ろかさろめかたをさろめかとい
ふま毛乃言をとくろ也當ま今さろめやとハいへとさろめやとハいへと共

一事なれい今も忘さろめやとをかとあやまてろやおかし
うな集中意ニま山科乃言羽乃山共おとふろ人共志ろ〳〵く
我こゝめろもとまろ言も墨滅なハ意とやとゝ乃ま此外なハ万
葉乃東歌ま一二首位ハ共ま也後撰乃一つ共ま也ま後
さろめのハとまのまれろあまとゝ中とまろ此集後共ものハ此序ま
まなひろなれいつまさろすいつれ後歟あろ〳〵

香川景樹大人著述

新學異見　一冊　同　既刻
六十四番哥結　一冊　同
うす氷　大人判歌結　一冊　同
中空乃日記　一冊　同
百首異見　一冊　同
桂園一枝　大人歌集　三冊　同
同　拾遺　前編拾遺合冊袖珍本　五冊　同
同　古今正義　總論序四季部九冊既刻　五冊　既刻
土佐日記創見　三十冊
萬葉集揖解　一冊　同
活言考　一冊　同

まゝの雪篆
大ぬし　中川自休述

東塢墨藏

嘉永三年庚戌春發行

弘所書林

江戸　日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛

同　芝神明前　岡田屋嘉七

大坂　心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛

皇都　三條通高倉東エ入　出雲寺文治郎

萬葉和歌集　全二十冊　同傍註
同　拾穗抄　同
同　山常百首　本居太平大人著
堀川院百首　大本中本　全　薄葉摺
同治良百首　同　上
和歌伊勢海　全　三冊
名所百首并兵籍図百体百人一首和漢対句合歌故実の色紙短冊書法の扁風折文紙の次第ホ詳ふ記す
十六夜日記　全　三冊
同　殘月抄　全
阿仏尼公鎌倉へ向ひ紀行ぬて松尾大人是を継書安政訂して委く註釈す且古図を加へと称ふ
源氏物語　大本　小本　半裁本　繪入
同　評釋　萩原廣道大人述
しまの装冲方の洞室長生余独大人の説と夜於一て今案を傍補一名文の名文なる所を評判して作者の深意を釈著一ヶ文の傍ふ迫世の俗語を注一婦女も容易く心得らるやう叮寧ふ歌論されこう書なくなり
秋の夜長物語　全　一冊

和歌御書物所　京都三條通堺町　出雲寺松柏堂

八代集　後撰集　拾遺集　千載集　新古今集　中本　小本　袖珍本
同類題集　薄葉摺　出来
三古今和歌集　大本　中本　小本　薄葉摺　掌中本　袖珍本　出来
二四代集　中本　全一冊
練玉和歌抄　折本　全一帖
二回代練玉のお書ハ八代集中心ち撰ひ出ふ分かりて懐要ふ
古語深秘抄　全十冊　合本三冊
歌学の書ふ十九種を集て古語深秘抄と歌語秘中の秘花抄のみ抄肝要のみふ式の和歌を例ふ和ふ仕ふ法作ふ法八病の縁和ふ仕ふ風姿七ヶ条の伝名所流御ふ仕ふ方ふ条ヶ条ふ仕ふ方ふ条ヶ条ふ仕ふ方ふ条ヶ条